

# 宗教と道德と教育福祉

宮 脇 陽 三  
(仏教大学教授)

## はじめに

青少年の道德性の育成と発達、国家および社会の福祉の充実と発展にとって、つねに重大な問題である。なぜなら国家や社会における福祉の盛衰は、次代を担う青少年の道德性が高いか低いかに、全面的に依存しているからである。

もともと道德教育は宗教とは密接不可分な関係にあったのである。欧米諸国および戦後のわが国の国公立学校における道德教育は、宗教的中立性という名目のもとに、教育課程において宗教的色彩はできるだけ排除されてきている。しかし問題は、はたして道德教育は宗教教育なしに可

能であるのかどうかということである。

本論の目的は、第一に道德は宗教と密接不可分の一体化したものであり、一方の理解は他方の理解なしには成立しないものであるということ、第二に道德教育がすべての児童生徒の道德的な判断力と理解力と洞察力を、できる限り十分に発達させることを助長することにあるかぎり、人間生活における宗教的な、また福祉的な見方とか考え方の理解なしには、青少年の道德性の適切な発達を図ることは困難なのではないかということを明らかにすることにある。

## 一、宗教と道德

道德は宗教に基礎をもたなければならないとか、道德は

神への信仰に基礎をもたなければならぬということについて、それは誤まりであると主張する者がいる。道徳的義務は神の命令に従うことはできないというのである。なぜなら神はAに対して、Aが善良であればと命令することは、自明の理であるとされている。神はわたくしに対して、Aにこのように行えと命令するのであるが、しかし、なぜ、わたくしは神に服従しなければならないのかということも、同じく自明の理とされているからである。

もちろん神は完全な存在であるから、神の命令に従わない場合には、神はわたくしを罰するであろう。神の命令に従うのは、わたくしが神の罰を恐れているがゆえに用心深いからであり、またそうすることが何かと好都合であるからなのである。

しかし、このことは神に従うということが、それ自体道徳的に善であるということではない。もし神が道徳的に完全であり、神が善であり、神の命令が正しいものであるならば、道徳的義務は神に服従せよということになるのである。

ところで、もしわたくしが神がある事柄について善であ

るということを認識していないならば、神が善であるということを認識することはできないはずである。もちろん神が善であるということは、観念上の真理である。しかし、このことを認識するためには、善についての先験的な認識、つまり神についての、いかなる論理的な認識からも先行しており、またそれから独立している認識をもたなければならぬのである。

もともと宗教学は帰依する価値のある存在を発見するための研究である。しかし、われわれがBという存在を帰依する価値あるものとして決断するのは、われわれ自身の洞察によつてなのである。Bという存在が帰依する価値のあるものであり、またそのようなBが存在するという決意は、神の意志とは関係のない道徳的判断によるのである。

道徳的基準は、それが神によつて欲せられているがゆえに、帰依する価値のある存在であるという前提条件を受け入れて、はじめて有効であるものに依存しているのである。この「価値あるもの」という言葉が示しているように、それは信じる者にとつても、信じない者にとつても同じく、道徳的判断なのである。

かくして、道徳が宗教に基礎を置いていたとは言えないことになるのである。どちらかといえば、道徳は帰依する価値のある対象でもなければ、なんら神でもありえないのである。いずれにせよ、われわれは自己自身の道徳的洞察によって、帰依する価値のあるものであると告白せざるをえないことになるのである。

ある事柄が神によって欲せられているか、または命じられているかを洞察することは、それが善であるか、またはそれを行うべきであるのかということを、必ずしも考慮しなくてもよいのである。まず、わたくしが、これらの命令が服従する価値のあるものであり、また神が道徳的に完全であると決断する必要があるわけである。わたくしがそれを決断するためには、神の命令とは関係なしに、価値基準によって行わなければならないのである。なぜならば、もしわたくしが神は完全であること、また神は善であるということを確認していないならば、わたくしの神に対する服従は、ヒットラーのような独裁者に対する服従と同じような強制されたものになるからである。

このような事情のもとでは、神は命令それ自体のための

残酷な命令を行うことになってしまっているのである。現在では命令それ自体のための残酷な命令は、多数の人びとの価値基準からは誤まりとされているのである。かりに「神からの命令」という言葉を、残酷な命令の前に置いたとしても、そのような命令を正当化することにはならないのである。したがって、宗教人が、神が命令それ自体のために、残酷に命令するような場合には、神に従うことは誤まりである」と主張するならば、同時に、かれは神の命令とは関係なしに評価するものが存在するということを主張することにもなるのである。

この場合、第一に宗教人も含めて、人びとが神の命令とは関係なしに評価するようなものが存在するのではないかということ、第二になぜ、宗教人は神の命令が服従する価値のあるものであるということ信じさせたり、道徳的な理由づけを与えたりしなければならないのかという疑問が出てくるかもしれない。第一の疑問点については、人びとは神の意志とは関係なしに、ある事柄について評価するのである。しかし、もちろん、そのことは、これらの人びとを神の意志とは関係なしに、道徳的な価値体系に献身さ

せるということにはならないのである。価値観の間には區別が存在しているのである。

価値観は、当然に、正しいとか誤りであるというような、道徳的判断を前提条件とはしない評価を行うことなのである。人びとが、神の意志とは関係なしに、事柄を評価するという事実は、必らずしも自己の拠り所とする独立した道徳的基準をもっているとは限らないのである。それは、人びとがある事柄に対して特殊な感情または態度を抱いているということだけを示しているのかもしれないのである。例えば、それは不快、嫌悪、または激怒であるかもしれないし、たんにある事柄を好んだり、嫌ったりしているだけのこともかもしれないのである。命令それ自体のためだけの、残酷な命令には、人びとは激怒や不快な感情を惹き起すであろう。また、このような感情は、倫理的に正しいとか誤りであるとかに、まったく関係なしに生じてくるのである。これらの感情は、道徳的判断の前提条件であるという意味では、道徳的な判断に必要であるかもしれないが、それにもかかわらず道徳的な善悪の判断とは関係がないのである。

第二の疑問点については、宗教人は、なぜ、かれが神の命令に従わなければならないのか、また、なぜこれらの命令が服従する価値のあるものであるのかについての、道徳的な理由を与えることができないかならないのである。この場合、罰の恐怖のような理由は除外されるのである。ある人が、神の命令は服従する価値のあるものであると決断するためには、道徳的な義務観とか、道徳的な善悪についての基準を、あらかじめ持つていなければならないということが主張されている。しかし、このような主張は、つぎのような二つの誤解にもとづいているのである。

第一に価値観の間には區別があるということが考慮に入られていないことである。この區別は、ある人が神の命令に従うための理由を与えることができるのである。神の命令に従うということとは、なにも道徳的にそれを行わなければならないとか、そうしなかった場合には道徳的に非難されるのではないかというようなことを、念頭に置く必要はないのである。

息子は父親を尊敬しているから、父親の命令に従うのである。息子は父親を愛している。父親は息子に対して親切

である。息子もまた父親に対して感謝の念をもっている。

これらのうちの、どれか一つ、または全部の理由から、息子は父親の命令に従うのである。これらの理由は、息子は父親の命令に対して、道徳的に従うべきであるというような感情を含んでいないし、またそのような必要もないのである。

神の命令に対する宗教人の服従の事情も、だいたいこれと同じようなものであるだろう。しかし、それにもかかわらず宗教人は、神の命令が道徳的に正しいか、すくなくとも神の命令に従う前に、神は道徳的に完全であるかどうかについて、決断する必要があるのである。

宗教人は神を尊敬し、また神に感謝しているから、神に服従するのである。なぜなら神は道徳的に正しくないことを命令することは、まったくありえないからである。慈悲深い神が、道徳的に正しくないことを命令することは、神の本質に矛盾することになるのである。それゆえ、慈悲深い神は、神の本質である愛と一致しないような命令を、Cに命令することはありえないのである。

ところで、神という言葉自体、「わたくしの神」または

「わたくしの主と神」というように告白している人びとによって、評価して使用されているのである。これらの人びとは、道徳的な決断を行なっているのである。かれらは、神が命令することはどんなことであっても、道徳的に遂行しなければならないと決意しているのである。

「わたくしの神」、「わたくしの主と神」というような信仰の告白は、第一に神と信仰告白者との相違の承認なのである。つまり創造者と被造物という関係における相違を明確に認めているのである。「わたくしの主と神」と信仰を告白している人は、実際には、かれが神による被造物であり、神に対して完全に全面的に依存しているものであるということを認めているのである。

つまり、かれは神が超越者であることを認めているのである。そして神の超越性こそは、帰依を誘発させることのできる神聖さの唯一つの源泉なのである。それゆえ、「わたくしの主と神」と告白している人は、神の道徳的または倫理的な意味において評価して、この言葉を使用しているのではなくて、かれらの神に対する深い感謝の念、またそれとともに神の命令に従うという固い決意を表明している

のである。

それゆえ、神の命令に従うという決断は、道徳的な決意ではなくて、感謝の決意であり、その感謝の念は、賞讃、崇敬、帰依によって表明されるのである。

神は服従する価値のあるものであり、また帰依する価値のあるものであると言われている。しかし神をそのようなものとして指定する場合には、道徳的基準を前提条件としなければならなくなるのである。言いかえれば、服従とか帰依の動機は、深謀遠慮的な動機ではありえないから、道徳的な動機でなければならないのである。深謀遠慮的な動機によるものは何であつても、道徳的には無関係なのである。人間の動機は、道徳的なものであるか、それとも深謀遠慮的なものであるかのいずれかなのである。宗教道徳人の場合には、後者は除外されており、また前者は神とは関係のない道徳的基準を前提条件としているのである。

道徳的行為の動機は、道徳的なものと、深謀遠慮的なものとに区別されるのである。もちろん、道徳的動機と、深謀遠慮的動機との間には、区別がある。しかし、これら二つのものは互いに排除しあうものではないのである。一方

では、われわれは他者の利益を考慮に入れる行為と、たんに利己的な行為とを区別しなければならない。他方では、道徳的理由のために慈善を施与する人と、饑餓を軽減するために援助するが、同時にその行為によって自己の政治的名声を強化しようとする人との間には相違がある。

後者は私利から行為しているのであるが、しかし同時に他者に対する関心も示しているのである。かれの他者に対する関心は、かれ自身の私的利益を反映したものであるが、しかし、それはたんなる利己的なものとは同じではないのである。かれの慈善事業への寄付は、他者の饑餓を軽減することにもなっているからである。その限りにおいては、たんなる利己的な人間と比べると、この寄付者は他者の利益を、自己自身の利益よりも前に置いているといえるのである。なるほど、その利益は、自己自身の利益の延長線上にあるものであるとしても、それだからといって、それを賞讃してはならないということにはならないのである。

ヒューム (Hume) によれば、同情と愛情は、他の人びとの事情に対するわれわれの関心にとって、中心的な動機であるとするならば、他者に対する関心は、ある程度まで

は自己自身に対する関心の延長であると言えないこともないのである。ヒュームが道徳的な事柄における同情と愛情について主張したことは、ある人が他者のために、ある事柄を行うための理由と、自己自身のために、ある事柄を行うための理由との間には類似性があるということである。もちろん、他人に対して関心をもっている人は、自己自身に対しても関心をもっているのである。

スイスの教育家ペスタロッチーが、「全ては他人のために、我が為にはなにももせず」の生涯を献げたのはなぜか。ペスタロッチーのような人は、児童を愛し、尊重したがゆえに、そのような行為をしたのである。例えば、赤穂義士が主君のために生命を賭ける場合、また海で溺れた息子を救助するために、自分自身は息子の身代わりになって死んだ父親の場合などがそれである。これらの場合の理由は、道徳的でもなく、深謀遠慮的なものでもなくて、人間が互いに結合しているさまざまな関係の中で生じてきたのである。

同様に、宗教人が道徳的に行為するための理由は、かれと神との特殊な関係から生じてくるのである。道徳の事柄

と宗教の事柄との間に区別があるということは、あまりにも単純に割り切ってしまうことである。信者が神に帰依する価値があるという時には、かれは価値判断を行なっているのである。この「価値ある」という言葉自体、ある道徳的判断を含んでいるのである。この「価値ある」という言葉を、「適当な」とか、「当然の」という言葉に置き換えることもできる。その結果、われわれは「帰依の適当な対象」とか、「帰依の当然な対象」について語ることができるのである。このことは、神学的にはなんら神聖性を汚すことにはならないのである。

ところで、Dが帰依の適当な、または当然な対象を見つけることは、ある種の道徳的判断を含むのではないかと反論されるかもしれない。なぜなら、「適当な」という言葉は、「神は善である」、または「神は道徳的に完全である」というような、ある種の認識を含んでいるし、また含んでいなければならないからである。もちろん、だれであつても、道徳的に完全でないものに対しては、帰依しようとは思わないであらう。「適当な」とか、「適切な」というような言葉を使用したとしても、この特質がなくなるわけ

はないのである。

つぎに道徳的判断という要素を含まない存在である神に  
帰依する場合について考察してみよう。ユダヤ・キリスト  
教における宗教人の自己自身についての認識は、神に対す  
る関係、創造者と被造者という関係における地位の認識で  
ある。このことは、信仰の根本にかかわる認識であり、神  
が帰依の価値あるものであるという道徳的判断を行なうこ  
とではないのである。このような認識は、部分的には宗教  
人をして、「わたくしの神」または「わたくしの主と神」  
というような告白へみちびくのである。

神によって創造された。被造者としての自己自身の認識  
は、たんに神に対する自己の依存だけでなく、神の超越性  
への自己の依存をも告白しているのである。この超越性と  
いう觀念の中には、畏怖させ、また魅惑する秘儀と呼ばれ  
るような靈感エクステイズも含まれているのである。神聖なものに直面  
する時、われわれの心の中には畏敬、莊嚴、感激の感情が  
起ってくるのである。これらのものはすべて、帰依におい  
ても認められるし、告白されてもいるのである。

そのような靈感は、われわれの認識の構成要素の一つで

あるし、また先験的なものや、宗教的な觀念と感情が形づ  
くられてくる、秘められた實在の源泉であり、感覚的経験  
とは関係なしに心の中にあるものである。このような  
靈感による経験こそは、宗教の最も本質的なものである。  
それは、ある意味では、人間の神に対する帰依にとつ  
て、必要不可欠なものである。

そのような畏敬、崇敬、感激および崇拜という感情に加  
えて、人間の有限性、依存性、創造性ということから生じ  
てくる、愛とか尊敬とか感謝というような感情もある。こ  
れらすべてのものが、宗教人における、神は創造者であ  
り、支持者であるという認識の根柢となっているのであ  
る。宗教人における神についての認識の核心は、「神は創  
造者である」、「神は救世主である」、「神は支持者である」  
という告白の中にとらえられるのである。

宗教人が、創造者としての神について語る時、かれは神  
の起源とか、昔々に起ったことについて語るのではなく  
て、かれの神に対する依存、神への万物の絶対的な依存に  
ついて語っているのである。この意味では、宗教人は、現  
世的な歴史の事柄よりも、もし神がその存在を停止した時



には、他のすべてのものが崩壊してしまうような依存性の事柄に関心をもっているのである。

「神は創造者である」という告白は、世界の創造者としての神についての神学的な説明ではなくて、「わたくしという存在は、神の恩寵の賜物であり、神による被造物である」ということを、自己自身で認識している」ということの個人的な信仰の告白なのである。もしわたくしが、「神はわたくしの創造者である」と告白するならば、わたくしは神の従順な僕であり、また神がわたくしの所有者であるという地位を認めるということなのである。わたくしという存在は神の恩寵の賜物であるということ、わたくしは神に対して絶対的に帰依するということを、自己自身で認めることなのである。つまり、それは、宗教人における有限な、依存的な被造物としての自覚を意味するのである。それゆえ、宗教人における帰依の態度は、神に対する畏敬、崇拜、愛、歓喜、尊敬、感謝などの感情によって示される多くの関係から生じてきたものである。

かくして、神が何であるかを適確に認識した人は誰でも、帰依の態度、神に対する支持の態度を持つてあ

うし、たんにそれだけではなくて、道徳的行為に対しても適確な動機を持つことになるのであろう。

ただし、このことは、神が何であるかを認識している人は誰であっても、神に対する帰依の態度を持つべきであると言っているわけではないことに注意する必要がある。もし、そういうことであるならば、道徳的基準を前提条件としなければならなくなるし、またそれゆえに、神より前に道徳を置くことになってくるからである。

宗教人が、神は帰依する価値のあるものであると告白する時には、とりもおさず道徳的判断を行なっているのである。しかし、このことは、帰依の態度が道徳的判断を行なうのでなければ、生じてくるのではないというわけではない。帰依の態度は、宗教人が道徳的判断を行うとか、行わないとかにかかわらず、もし、かれが神の本質を自覚するようになった場合には、どうしても持たざるをえないようなものである。もし、そうであるとするならば、宗教からの道徳の独立というようなことは成立しないことになるのである。

## 二、宗教と道德教育と福祉

宗教と道德は、歴史的に見れば、いずれも他方なしには、いかなる研究も成立しないくらいに、互いに密接にかみ合っていたのである。しかし、道德はある人と他の人との外面的な關係に關心をもつものであり、宗教は人間の内面的な理想に關心をもつものであるから、道德と宗教は、この点で区別されるのである。つまり、道德は、ある人の他人に対する行動の關係からみた外面的な様式を認識するものであるのだから、人間の道德と、宗教における個人の理想との間には、明確な境界線が引かれなければならないのである。

われわれの自己自身についての自覺の認識は、あくまでもわれわれの關係に依存しており、また外部的世界との出会いであり、われわれの行為ならびに他の人びとの接觸は、互いに自己自身についての適確な自覺と認識とに依存しているのである。つまり、人間の社会的または道德的行為は、特定の個人の理想とか自覺と、決して無關係ではありえないのである。

われわれは、自己自身や自己の環境についての、精深な認識をもつのでなければ、道德的に行為することはできないし、また他の人びとの行為も、適確に評価することはできないのである。われわれは、そのような認識をもっているのであれば、善い結果と悪い結果、また善意と惡意とを区別することもできないのである。

かくして、道德教育においては、道德の宗教との關係、言いかえれば社会的行動と個人的理想との關係を考察しなければならぬのである。このことは、道德教育がたんなる徳目とか、行為規範または行動規則の伝達であるとみるのではなくて、われわれの社会における他の人びとの出会いや交流の中で、道德觀念を認識し適用する過程であるとみる時に、一層明らかとなってくるのである。

言いかえれば、もし道德教育が主として児童生徒に対して、道德的な認識と判断をできるだけ十分に発達させることを助長することにあるとするならば、また道德教育がさまざまな社会問題について行動原理を組織的に説明し適用する過程であるとするならば、児童生徒は、個人的な理想と態度、ならびに個人的な認識と自覺の觀念を発達させな

ければならなくなるのである。このような道德教育観は、児童生徒が道德的問題について思考したり、洞察したり、反省したり、道德的行為を遂行したりすることを必要とするのである。このような道德教育は合理的であるし、またそれゆえに、ある權威にもとづいて行動を正当化するような見解とは、區別することができるのである。

かくして、合理的道德としての道德教育は、宗教といったどのような關係をもっているのかという問題が起ってくるのである。もちろん、個人が真理を語ること、公平であること、自由であることなどの基本原理を守るという行為について思考することを要求するような道德は、宗教とはあまり關係をもっていないかもしれない。しかし、宗教道德であれ、また人間尊重の道德であれ、どのような道德であっても、道德的行為についての思考や反省を要求しなかったり、また社会の構成員としての責任感をもたせたり、道德的自律性をもたせたり、思慮深い行動をさせたりするのに必要な道德的な成長と発達を顧慮しない場合には、疑問の余地が残るのである。そのような特質をもたない道德と道德教育は、注入教育のそしりをまぬがれないの

である。

したがって、合理的道德は、それだけでは不適當なのである。なぜなら、第一に、それが本来そうでなければならぬように働かないがゆえに不適當なのである。現実の世界は、もし人びとが互いに上品に行動したならば、まことに居心地のよい所であるだろう。確かに、人間は知識と技術の方面では、きわめて高度に進歩し発達してきたといつてよい。しかし、それにもかかわらず、われわれはまだ世界が円満に維持され、発展していくことのできるような平和とか、調和とか、福祉や善意を完全には実現していないのである。実際には、世界は、平和と調和と福祉に代つて、戦争や社会的紛争や、道德的退廃に直面しているのである。

第二に、合理的道德が、公平であるとか、真理を語ることなどの基本原理を前提条件とするものであるかぎり、道德的な義務と責任は、それ自体を越えて、ある種の權威とか信託の源泉へ志向するのである。これは、カント(Kant)が理性の限界について語った時、宇宙の理法として心に留めたことに似ているものである。かくして、自己自身や宇

宙一般についての認識の基本原理と前提条件について、疑問が投げかけられている点に到達したのである。

究極的には偶然である世界において、人間が占めている位置について、われわれが思いを馳せる時、われわれは、自己の人格それ自身に対する畏敬の念が起ってくることを避けることはできないのである。理性の働きが、その限界に達するのは、まさにその地点である。

神が究極的な限界であり、神の實在は、究極的には非合理的なものである。なぜなら、神はその本質からみて、限界に対してなんらの理由も与えることはできないからである。神は具体的なものではない。しかし、神は具体的な實在の基礎なのである。神の本質に対しては、なんらの理由も与えることはできない。なぜなら、神の本質は合理性の基礎であるからである。

合理的な道徳体系は道徳の基礎に対して真摯な考察が加えられる時のみ、適切に認識されるのである。このことは、われわれが形而上学的な、超越的な次元へまで、思考を進めることを意味するのである。道徳問題の考察において、全体としての人間存在に関係した問題が生じてきたの

である。もし、道徳が知性によって認識されるものであるならば、道徳問題は、人間生活の本質と目的についての一般的な背景の中で、説明されなければならないのである。

もし、道徳を人間生活の本質と目的についての一般的な背景の中で説明するのであれば、道徳を適確に認識することはできなくなるし、理性の要求する「生活全体を見る」ということを否定することにもなってくるのである。

われわれは、社会的関係と、社会の中の行動や実践を通じて、道徳を考察するのである。しかし、このことは、もしわれわれが生活の中で追求している事柄についての認識をもつていなければ、まったく不適當となるし、不完全になると考えられるのである。それゆえ、人生の意味と目的についての観念が必要となってくるのである。

かくして、道徳は、三つの事柄に関係していると考えられる。その一つは、個人間の公平な処理と調和に関係した事柄である。その二は、各個人の内部で整理したり調和させたりすることに関係した事柄である。その三は、全体としての人間生活の一般的な目的、つまり人間は何のために生まれてきたのかということに関係した事柄である。

現実の世界における平和とか、調和とか、社会福祉についての認識は、このような究極的な目的や意味についての認識がなければ、適切に自ら行動することができないにもかかわらず、これまであまり真剣に考慮されてはいなかったのである。思うに、人間生活の目的と意味と本質に関係するような道徳観は、宗教観そのものではないとしても、宗教問題の主題と密接不可分な関係にあるのである。宗教と道徳は、ともに人間の社会性、人格の神聖性、社会福祉、人格の尊重などに関心をもっているのである。

そして、これらすべての認識は、人間の本質という背景の中でのみ、はじめて適確にとらえられるのである。この場合、宗教の役割は、これらの究極的な価値の源泉とか、権威としてみられるべきではなくて、むしろ、それらのものについての解釈の、一つの源泉としてみられるべきものなのである。宗教は、人間生活の織りなすさまざまな脈絡を拡張するのである。そうすることによって、宗教は人間生活における神聖な領域や、人間尊重のような究極的な価値の強化を促進するのである。

宗教は、道徳の基礎原理を現実の人生の場面において適

用したり、また畏敬の念を覚醒させたりすることによって保証したり、強化するという役割を担当するのである。道徳教育の目的は、児童の道徳的な思考力と洞察力と判断力を、できるだけ十分に発達させるように助長することである。このことは、宗教の認識によって、また人間生活の本質や目的や意味についての認識によって、最もよく達成されるのである。

## むすび

本論文のねらいは、第一に、宗教と道徳はどの程度まで結びあっているのか、また統合されるのか、第二に、道徳の適確な認識と、宗教は、道徳教育において、どのような意味をもっているのかについての認識は、宗教についての深い認識なしには困難であるということを考察することにあつた。もし、児童生徒が道徳観念を、どのように認識し適用するか、またたんに規則や慣習に従うのではないということを教えられなければならないとすれば、宗教についての認識が、どうしても必要となってくるのである。

要するに、道徳が、超越的なもの、または形而上学的な

ものと関係をもつものであるかぎり、人間は、超越者、存在の基礎、神聖なもの、神、超自然、その他どんなものであれ、神聖なものとの出会いに直面させられるのでなければ、真に道徳的に教育されたとは言うことはできないのである。(五三・八・二七)

#### 参考書

- (1) Ramberan, O. G., *Moral and Religion*, "Religious

*Education*, LXXII, n. 5, 1977.

- (2) 拙稿「小・中学校の教育課程」(石堂豊・宮脇陽三他編著「現代教育原理」所収)、めいけい出版、昭和五三年
- (3) 拙稿、戦後の道徳教育の内容、(富田義雄他編著「道徳教育の研究」所収)めいけい出版、昭和五三年
- (4) 石堂豊監修、宮脇陽三、久下陸他編「現代教育活動事典」世界書院、昭和五三年